

列挙法について

伊土 耕平

日本語の列挙法のうち助詞なしで名詞を並べるタイプについて、先行研究を吟味し、多数の実例を観察した上で、筆者自身の言語感覚と常識的・辞書的な観点から検討を加える。その結果、典型的な列挙法とは「多数の短い同格の言葉を、勢いよく無秩序に並べ立てる表現法」であると結論する。

Keywords : 列挙, 勢い, 全部列挙, 並列

1 はじめに

列挙法とは、多数の言葉を並べ上げる表現法である。ただそれだけのことのように思われるかもしれないが、私見では、まだいろいろと問題がある。

本稿は、列挙法に関する問題をいくつか取り上げ、それらに筆者なりの解答を与え、最終的には、列挙法とはどんなものであるかを明確にしようとするものである。

列挙法にも形式的にはいくつかのタイプがあるが、ここでは典型的なものとして、現代語の、助詞なしで名詞を並べるタイプを主に取り上げることとする。また、先行研究をまとめて述べることはせず、関連する箇所において適宜取り上げることとする。

なお、本稿において「列挙法」とは修辞法の一つ、「列挙」とはそれ以外も含む広い概念、と一応規定するが、ほとんど同意である。

2 要素の数について

まず、列挙される要素の“数”について述べたい。文法学者は並べる要素がたった二つでも列挙と呼ぶのに対し、修辞学者の多くは多数の要素があることを列挙法の要件とする。

例えば、文法学者である寺村秀夫は、ヤラという助詞について「ヤと違って、列挙の最後にヤラをつけてもよい。」と述べ、

(1) 缶詰やらインスタントラーメンやらを買い込んだんできた。

という例文を挙げている(寺村1991:212)。要素は「缶詰」と「インスタントラーメン」の二つしかないが、このような例も「列挙」と言っている。と言うより、要素の数など問題外のようなものである。

これに対して修辞学者は、要素の「多さ」を重視することが多い¹⁾。例えば佐々木健一他2006は「数の多さは列叙の本質である。幾つも挙げるから列叙なのである。」と言う(p.325)。(佐々木らの枠組みでは「列挙」は「列叙」の下位に位置付けられる。)

常識的に考えても、要素は多いとするのが普通ではないか。手近の辞書の記述を列挙してみよう。

- (2) 並べあげること。一つ一つ数えあげること。(『日本国語大辞典』2版3刷,2003)
ならべあげること。数え立てること。(『広辞苑』6版1刷,2008)
一つ一つ数えあげること。並べたてること。(『大辞林』6刷,1989)
並べあげること。一つ一つ数えあげること。(『大辞泉』1版1刷,1995)
一つ一つ事例を並べて挙げていくこと。(『集英社国語辞典』2版1刷,2000)
一つ一つ数え立ててあげること。並べ立てること。(『岩波国語辞典』3版8刷,1984)
関係する事柄を省略せず、一つひとつ並べあげること。(『新明解国語辞典』6版12刷,2008)

「多い」という言葉自体は使われていないけれども、「並べあげる」「数えあげる」とあるからには

「多数」の要素をとりあげるといふ含意があるように思われる。

文法学と修辞学では観点が異なるのであり、術語の外延が異なるのもかまわない、という意見もあろう。しかし、同じ表現を指す術語が二つの分野にあり、それらの外延が異なるのはあまりよいことではない。また、学術用語が一般的な意味（辞書に書かれているような意味）と異なるのも、あまりよいこととは思えない。

筆者としては、要素が二つの場合は「(ただの)並列」と呼ぶべきで、文法的な並列(並立)表現のうち、要素が三つ以上で、後に述べるような複数の要件を満たすものを「列挙法」と呼ぶことにしたい。

実例を観察してみよう。列挙法(またはそれに準ずる)部分に下線を、それ以外に注目部分があれば二重の下線を付ける。[]内は出典や注、/は原文の改行箇所である(スペースの節約のために詰めるのである)。また、小説などの出典は、とくに断りのない場合はすべて新潮文庫である。

(3) 薯・玉葱命たしかに息吹く部屋青年の客坐れるごとし [富小路禎子,「折々のうた」『朝日新聞』2004.6.23より]

(4) 新たにつくった学校の花壇にもいろいろの草花が集められた。農家の垣には梨の花と八重桜、畠には豌豆と蚕豆^{そらまめ}、麦笛を鳴らす音が時々聞えて、燕が街道を斜に突切るように飛びちがった。蟻、蜂、油虫、夜は名の知れぬ虫が頻にズイズイと鳴き、蛙の声は湧くようにした。[田山花袋『田舎教師』]

(5) そのころ、私はやたらにたくさんの病院に通っていた。歯科、皮膚科、耳鼻科、眼科。財布には色とりどりの診察カードが入っていて、週に一度ずつのピアノと習字の稽古同様、病院通いは放課後の生活の一部だった。[江國香織「はるかちゃん」、『すいかの匂い』所収]

例文(3)は要素が二つ、(4)は三つ、(5)は四つである。(3)よりは(4)や(5)のほうが列挙法らしいと判断するのだが、どうであろうか?つまり、要素の数は最低でも3個くらいは必要だと思うのである。

この「3個」という数は、強い根拠があるわけではない。本稿は何かを論証するというものではなく、あくまで筆者自身の言語感覚にもとづき、列挙法とはこういうものであると述べていくものである。最終的には大方の納得が得られることを目的としてい

るが、そうならない場合もあるかもしれない。

筆者はランダムに800例ほど列挙法の例を集めたが、そのリストの中に、トヤヤなどの助詞を使わず、しかも名詞が二つだけの例は、ほとんどない。つまり、はだかの名詞を並べる表現においては3個以上が普通なのである²⁾。この事実が「要素が3個以上」を要件とする弱い根拠である。

さて、次の例のように、「など」「……」などをつければ、要素は二つだけではなく、まだ他にもあるという含意が生じ、“列挙法らしさ”が増すように思われる。

(6) [26歳・男] /音楽関係の仕事を夢見て、ガソリンスタンド、居酒屋などアルバイト先を転々と変えてきた。/「夢にだまされたのか。友達も同じ。デザイン、IT……。やりたいことはあるのだけれど」[[分裂につぼん 東京・高島平団地から]『朝日新聞』2006.2.12]

次の例は「なにをやっても」とある。この場合も、具体的に書かれている要素は二つしかないが、まだ他にもあるという含意が生ずることによって“列挙法らしさ”が増すように思われる。

(7) 私は急に知恵がついてなにかひと皮ぬいだように世界が新しく明るくなると同時に、ひ弱かったからだがめきめきと達者になり、相撲、旗とり、なにをやってもいちばん強い二三人のなかにはいるようになった。[中 勘助『銀の匙』岩波文庫]

もしこれらの観察が正しければ、2個の要素をただ並べるだけでは列挙法としては分量的に不足である、という考えを補強できる。

しかし、要素が多ければ多いほどよい、というわけでもない。次の例を見ていただきたい。

(8) 利根川の土手にはさまざまの花があった。ある日清三は関さんと大越から発戸までの間を歩いた。清三は一々花の名を手帳につけた。——みつまた、たびらこ、じごくのかまのふた、ほとけのぎ、すずめのえんどう、からすのえんどう、のみのふすま、すみれ、たちつぼすみれ、さんしきすみれ、げんげ、たんぼぼ、いぬがらし、こけりんどう、はこべ、あかじくはこべ、かきどうし、さぎごけ、ふき、なずな、ながばぐさ、しゃくなげ、つばき、こごめざくら、もも、ひほけ、ひなぎく、へびいちご、おにたびらこ、ははこ、きつねのぼたん、そらまめ。[田山花袋『田舎教師』]

これは筆者が収集した中でもっとも要素数が多い(32個)のものである。文中に「一々」とあることから、花の名を一つ一つじっくりと記入していくことがわかる。そして、その花がやたらと多いのである。主人公の偏執的な性格がうかがわれる。

この表現は粘着的で、列挙法らしい、ぼんぼんと要素を並べていく感じがない。要するに、ただ要素が多ければよいというのではなく、多すぎると逆に列挙法らしさがなくなる場合もある。そのような矛盾した性格を列挙法は持っているのである。

次の例も要素がかなり多いが、(8)よりは調子がよく、列挙法らしい。文中の「つぎつぎと」という言葉によって、勢いが出ているのであろう。

(9) 私は私の家庭生活を、つぎつぎと破壊した。破壊しようとする強い意思が無くとも、おのずから、つぎつぎと崩壊した。私が昭和五年に弘前の高等学校を卒業して大学へはいり、東京に住むようになってから今まで、いったい何度、転居したろう。その転居も、決して普通の形式ではなかった。私はたいてい全部を失い、身一つでのがれ去り、あらたにまた別の土地で、少しずつ身のまわりの品を都合するというような有様であった。巨塚。本所。鎌倉の病室。五反田。同朋町。和泉町。柏木。新富町。八丁堀。白金三光町。この白金三光町の大きな空家の、離れの一室で私は「思い出」などを書いてきた。天沼三丁目。天沼一丁目。阿佐ヶ谷の病室。経堂の病室。千葉県船橋。板橋の病室。天沼のアパート。天沼の下宿。甲州御坂峠。甲府市の下宿。甲府市郊外の家。東京都下三鷹町。甲府水門町。甲府新柳町。津軽。[太宰 治「十五年間」、『グッド・バイ』所収]

「つぎつぎと」という言葉以外にも、めまぐるしく転居したという文脈が、勢いのよさを出しているように思われる。

以上、列挙法にとって要素は多いほうがよいが、多すぎるのもよくないと、まずは述べた。要素の数などどうでもよいと思われるかもしれないが、きわめて基本的なことである。

3 勢いのよさ

前節で少し述べたが、列挙法においては勢いのよさも重視すべきである。これも主観的な物言い、客観性を重視する最近の研究者からは響きを買いたいのだが、列挙法の特徴として、見過ごすことはできないと考える。その理由は、まずは直感的にそう思

うのだが、さらに言えば、同格の要素を並べ立てていけば、おのずとたたみかけるような感じが出、そこには力強さとスピード感——合わせて「勢い」と言う——が出てくることが多いはずだからである。

例えば、先の用例(5)が典型で、「歯科、皮膚科、耳鼻科、眼科」という言葉がぼんぼんと勢いよく並べられる。

ちなみに丸谷才一1977は、いわゆる列挙法を「羅列」と呼び、「数多くの内容を語りながらしかも冗漫におちいらす、テキパキと話を進め、文章のテンポを早めたり調子を高めたりする技法である」と言っている (p.206)。この「テキパキと話を進め」とか「テンポを早め」というのが、勢いのよさと同じことである。

もっとも、丸谷説に対しては佐藤信夫1978の批判がある。すなわち、丸谷の挙げた用例がたまたまテキパキとした文章であっただけで、「その説明は理論的にはあまり意味がない」、列挙は「数多くの内容を語ろうとしてけっきょく冗漫に《おちいつてしまう》方法でもある。」と述べている (p.262f)。

たしかに、先の(8)のように、要素が多すぎてしかも粘着質の場合は、冗漫におちいると言ってよいだろう。しかし、それはむしろ例外的な場合である。佐藤の言うことは当たっていない。

他方、勢いがあるとかテキパキとするというのは、そのようになることが多いというだけで、それほど理論的には意味がないかもしれない。しかし、そのようになることが多いということは、それだけ本質的なことであるとも考えられる。

ちなみに、この「テキパキ」ということは、『現代言語学辞典』(田中春美他1988)の「enumeration (列挙法)」の項にもある(執筆者不明)。次のように言っている。

同格の語句を次々に並べ立てていく修辞法。ことばのあや (FIGURE OF SPEECH) の一種。テキパキ並べると調子が高まり、文章が生き生きとする。

なお、佐藤らは近著において、「たたみかけ」を列挙から区別する。佐々木健一の説明によれば、次のように、列挙とともに、列叙の下位に位置づけるのである(佐々木他2006: 324 ff)。

列叙 (語句や文をいくつも重ねる。accumulation)
 列挙 (すべての要素を並べ上げる。enumeration)
 漸層 (同位の要素を幾つも並べ、それらの意味の間に、大きさや力が連続して変化してゆく秩序を置く)

たたみかけ（短い語を、いくつも急速に重ねて
ゆく。epitrochasm）

次節に述べるように、列挙が「すべての要素を並べ上げる」とは考えるべきではない。これらの中では、むしろ「たたみかけ」が本稿がイメージする列挙に近い。

この枠組みは佐藤の遺稿のままなのであろうが（佐々木他2006は、佐藤の遺稿（主に全体の枠組みと用例）に佐々木らが加筆して出来上がったという）、筆者としては、むしろ佐藤の旧著1978にある、列挙法とは「さまざまの同格のことばを次から次へとならべたてていく表現」（p.259）であるという定義に従いたい。

「次から次へとならべたててい」けば、勢いも生ずるであろう。列挙法には勢いのよさがあると言つて、それほど間違いはないと思う。

4 「すべて」か？

多数の要素を勢いよく並べたてるのが列挙法であると述べた。さらに、要素を「すべて」挙げるのが列挙だとする研究者がいるのを見た。その一人、佐々木健一は列挙について、

列叙のなかでも、すべての要素（すべての部分、すべての状況、すべての仕方、等々）を並べ上げる《あや》をいう。すでに挙げた「地震 雷 火事 親父」は、恐ろしいものの「完全リスト」という性格をもっている。これが開いたリストで、幾らでも書き足せるというのでは、表現の妙味は全く失われてしまう。

と言う（佐々木他2006：327）。また、(2)に挙げた辞書の中で『新明解』は「事柄を省略せず」云々と言うので、これも、すべての要素を挙げるのが列挙であると考えていることがわかる。

この問題は、佐藤信夫1978の次のような説明が妥当であるとする。「列挙表現はことばの外形をその意味内容に似せるころみである」（p.263）。つまり、あくまで「似せる」だけであつて、現実とまったく等価というわけではない。よつて要素の数も、すべてとなるとは限らない。

用例を見ても、例えば(5)は四つの診療科が述べられており、常識的にはそれだけで十分多く、すべて挙げられているような気がする。しかし原文では、その後にもう一つ「小児科」が加わる。つまり例文(5)の時点では、すべてではないのである。結局、

列挙法では要素を多く挙げようとはするが、それらが該当するすべてであるとは限らない。例文(4)を見ても、「蟻」「蜂」「油虫」以外に、まだいろいろと虫はいそうである。

列挙表現は思いつくままに要素を挙げるものであり、その結果“まだ他にもある”という含みすら出てくるものである。つまるところ、すべての要素を挙げるということは、列挙法の要件ではない。むしろ「開いたリスト」であつて、「幾らでも書き足せる」ものという見の方が正しいのではないか。

しかし、“すべてを挙げたい”という願望も、おそらくあるであろう。先に(2)で見た辞書の定義には「並べあげること」「数えあげること」というのがあつた。この「あげる」という言葉には“しとげる”“終わりまでする”という含意があることから、そのことが予測される。また、木原 茂1978のように、“物尽くし”が列挙法の典型であると考えれば、やはり同じことが考えられる。

むしろ、結果的にすべてが挙げられている列挙表現もある。しかしそれはあくまで「結果的に」そうになっているだけであつて、それが列挙法の本質とは考えられない。

例えば、次の例は、「五つ」と明記されていることから、要素がすべて列挙されていることがわかる。

(10) [難波功士著『族の系譜学』について] 本書は内外の研究史を総覧したうえで、11のユース・サブカルチャーズを対象に、階級・メディア・世代・ジェンダー・場所という五つの視角から分析を加え、初の通史を試みる意欲的な研究書だ。[橋爪紳也による書評、『朝日新聞』2007.7.1]

このようなものは、列挙法にとっては“有標”の形式だと考えることができる。そうだとすると、無標の、つまり普通の場合は、要素をすべては挙げないということになる。

さらに、(10)は引用のトを含んでいる。引用のトの前にある要素は、通常それで全部である。トがあることも有標的であると言ってよい。次の例も見られたい。

(11) 小さな商店街通りが二本あるきりだから、人通りも多くはない。萬田は入口の川端に車を停めると、間隔をあけて安美の後ろ姿を追った。／薬局、衣料品店、パチンコ屋、ラーメン屋、と並んでいる。安美はアーケードに入ると日傘をたたんで、真っ直ぐに歩いて行く。[村田喜代子『人が見たら蛙に化れ』朝日新聞社]

この例も、普通に読めばこれら四つの店で全部であろう。それ以上なのであれば、リーダーや「など」を使うべきである。先に見た(6)のように。

さらに、指示語も、通常は外延を限定するので、指示されている要素はそれらですべてとなる。例えば、

(12) [記憶喪失だった「僕」は記憶を取り戻した。] 嫌だ。僕は磯村ギンジでいたい。ギンジの方がずっと好きだ。僕はやっと手に入れたばかりの、磯村ギンジの新しい携帯を見た。昭光、釜田、安楽ハウス、リンコ、フウヤン、小沢、香織さん。たったこれっぽちの番号が、磯村ギンジを形作っているのだ。いや、磯村ギンジを作った人間はそれだけじゃない。ミカ、聡美、専務。懐かしさと、旅の辛さの記憶とで、臉の裏が熱くなった。[桐野夏生『メタボラ』朝日新聞社]

この例も、下線部が「番号」(の持ち主)のすべてであると読める。「これらの番号」としても同じことであるから、「たった」とか「ぽちち」などの言葉によってすべてであると読めるわけではない。

以上、いくつかの有標形式をみた。それらは要素がすべてである挙げられているということを含意していた。ということは、繰り返すが、通常の列挙表現はすべての要素を表してはいないということになる。結果的にすべてが挙がっている場合があるにしても。

なお、文法研究には「部分列挙／全部列挙」という有名な考え方が古くからある。すなわち、例えば「AやB」が前者で、AB以外にもまだ他の要素があるという含意があり、「AとB」が後者で、ABですべてであるという含意があるというのである。

この考えは基本的には正しい。ただ、要素が二つしかないときは、「列挙」という言葉を使うのはふさわしくないと言うのである。(そもそも本稿では、トやヤなどの助詞つきの例は基本的に考察の対象外である。)

5 要素の長さ

さて、次の例を見ていただきたい。

(13) しかし孝二にとって、大阪はそれほど魅力的ではなかった。そのかおは、なるほど多彩で絢爛としているが、内臓は貪欲そのもので、まさに吸血鬼そのものだった。孝二は天王寺の駅に立って、何度かその思いを深くした。

複雑に交錯する 鉄道。

絶え間なく発着する 列車。

呑吐される 大量の物資。

世の人々にはそれが都会の殷賑、繁栄の原動力に見えても、孝二には、それは吸血鬼の吸血作用としか思えない。[住井すゑ『橋のない川 (四)』]

この例では、各名詞に修飾語がついて、各要素の長さが長くなっている。各要素が言わば“重く”なっていて、主人公の感じている重苦しさや息苦しさを表現している。しかも、改行によって要素の一つ一つで、いちいち立ち止まらなくてはならない。その結果、勢いのよさがない。

逆に言えば、各要素は短いほうが列挙法らしくなるのである。このことも要件に認めたい。この点からも、上に見た、佐々木らの「たたみかけ」(短い語を、いくつも急速に重ねてゆく。)がむしろ典型的な列挙であると考えてみる。

(2)に挙げた辞書の定義の中に「数え立てる」「並べたてる」などがあるが、この「たてる」という語は“はっきり示す”という意味であろう。そのためには、一つ一つの要素は短くまとまっているほうが効果的である。列挙法で並べられる要素は短い方がよいと考えるのは、それほど間違いとは思えない。

さらに用例を観察してみよう。

(14) 僕はあらゆることを気にしない術を何とか身につけなければいけない、と焦った。あらゆることとは、僕が人の十倍以上は持っている、負の感情のすべてだった。／例えば、父への憎しみや恨みは、消えるどころか一層燃え盛っていた。そして、自分勝手な母への嫌悪。行動的な佐緒里への嫉妬。昼間働く会社員たちへの羨望や、自分が世の中から取り残されているのではないかという引け目。つまりは、気楽で孤独など気にならない生活をしていても、これらの負の感情は、ぶり返す風邪のようにしつこく僕を襲い、鬱ぎ込ませもしたのだった。[桐野夏生『メタボラ』朝日新聞社]

(15) それから、自分で草野球チームを作った。ポジションは投手。曲がらないカーブと、切れないスライダー、落ちないチェンジアップが持ち球。だから、野球選手であれば、高校生だろうが、中学野球の子だろうが、尊敬しているんです。[萩原聖人「甲子園に、恋をした。」、『朝日新聞』2007.8.19]

どちらも名詞に修飾語がついており、勢いのよさ

が感じられない。そのことによって、(14)は重苦しい負の感情、(15)は“しまりのなさ”が効果的に表現されている（一部、助詞ヤ・トがついているが）。

6 最後の要素が重要か

すでに少し述べたが佐々木健一は、例えば「地震 雷 火事 親父」が列挙の典型で、「完全リスト」の性格を持つが、その実、問題なのは最後の「親父」であって、列挙という形はその一つを強調するための枠組であると言う（佐々木他2006：327）。

また丸谷オ一は、西欧風の羅列（＝列挙）では末尾に重いものが据えられて、劇的緊迫をもたらすことが多いと言う（丸谷1977：208）。

確かに、そのような例はある。しかし、多くの例を見てみると、そのような例はむしろ少ない。すでに見た例を見ても、最後の要素が重要であるとはあまり思えない。例えば(5)は、最後の「眼科」が強調されているとは思えない。(9)には二箇所あるが、少なくとも前の列挙箇所は、末尾「白金三光町」がとくに強調されているとは思えない。（しかし、後の列挙箇所では、末尾の「津軽」が強調されているのかもしれない。言うまでもなく、太宰にとって津軽は特別な場所であるから。）

さらに言えば、「地震 雷 火事 親父」においても、「親父」が一番こわいとはあまり思えない。

何が重要かという問題は、価値観がからみ、形式的・客観的には結論は出ないだろう。しかし基本的には列挙法の並べ方は無秩序であり、最後の要素が強調されるということは基本的にはない、と考える。

もっとも、最後の要素だけを特別扱いする場合も確かにある。しかしそのためには少し表現形式を変えるのが普通である。例えば、

(16) 十月十日。「新撰組！」の最終収録が行なわれた。[中略]収録が終わりに近づくとつれ、スタジオには続々と出番を終えた出演者たちが集まってきた。山本太郎、堺雅人、中村勘太郎、小林隆、そして番組途中で死んでいったその他の隊士たち。厳粛な雰囲気の中、時間差で懐かしい顔ぶれが続々と集まってくる様子は、なんだかお通夜みたいだった。[「三谷幸喜のありふれた生活」『朝日新聞』2004.10.23]

(17) 兵士に交ざって約2800人の聖職者が従軍し、悪には必ず立ち向かい、決して譲歩してはならないというあらゆる宗教の教えを思い起こさせている。米軍を構成するのはプロテスタント、カトリ

ック、ユダヤ教、そして4千人を超えるイスラム教徒だ。[『エルサレム・ポスト』社説、『朝日新聞』2003.3.24]

(18) [プロ野球・楽天] チーム最多の19安打。プロ初勝利。プロ初本塁打。そして初めての3連勝。歴史を刻む喜びが、選手たちを走らせる。[『朝日新聞』2005.5.27]

(16)は、山本太郎たちはもちろんのこと、名前は出さないが忘れられない人々がいるという、「その他の隊士たち」に対する特別の思いが込められているように感じられる。(17)は、イスラム過激派を攻撃する米軍の中にもじつは「イスラム教徒」がいるという、意外な事実を強調する。(18)は、チーム安打数や個人記録よりもチームの勝利（「3連勝」）が最重要、という含みがあろう。

いずれも「そして」という接続詞によって、最後の要素を別扱いにし、強調している。このような例が多いのである。

もっとも、「一見秩序がないようなものを並べても、解釈がすぐに秩序を持ち込もうとする」（佐々木他2006：325）という佐々木の主張も首肯できる。人間の認知能力は、何事にもまとまりやつながりを見出そうとするものだからである。しかしだからと言って、それが列挙法の本質であるとは考えられないのである。

その意味では、次のような表現は、典型的な列挙表現からは、ややはずれる表現ということになる。これは見たままの順序であって、秩序があるからである。

(19) 私は、まっすぐに走りだした。歯医者。小鳥屋。甘栗屋。ベエカリイ。花屋。街路樹。古本屋。洋館。走りながら私は自分が何やらぶつぶつ低く呟いているのに気づいた。[太宰治「ダス・ゲマイネ」、『走れメロス』所収]

7 無秩序さ

前節でも少し述べたが、列挙法は、文法的には同格の語を並べるのであるが、意味的にはかなり多様なものが集まり、全体としては無秩序になる。佐藤信夫の言い方に従えば、「混乱あるいは繁盛をことばで造形するには、うってつけの形式」（佐藤1978：263）なのである。この点にはまったく異論はない。

いくつか例文を挙げよう。

(20) 年中借金取りが出はいらした。節季はむろんまるで毎日のことで、醤油屋、油屋、八百屋、鱈屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入口で牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生姜、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取りの姿が見えると、下向いてにわかには餛飩粉をこねる真似した。〔織田作之助『夫婦善哉』〕

(21) [地方の骨董市。] 競り荷を広げたトレイは、ローラーに載って出てくる仕掛けだ。建吾はそれを眺めてニヤリとした。／「何や。今日も大したお宝の山やないか」／色焼けした漆器の椀揃い。／時代のない有田焼の皿。デパートの進物食器。／毀れた古戸棚、動かない柱時計。／色の剥げたブリキの玩具。／耳に当てる部分が外れた聴診器。／「こんなもん、誰が買うんか？」／「医療器具のマニアがおるんじゃ」〔村田喜代子『人が見たら蛙に化れ』朝日新聞社〕

(22) [旅行でいろいろなくした。] ポケット計算機、ノート、地図、小銭入れ、サンタン・オイル、ボールペン三本、アーミーナイフ……、そういうものがまるでそれぞれの寿命を終えて昇天していくみたいに、ひとつまたひとつ音もなく消えていくのだ。〔村上春樹『辺境・近境』〕

(23) 一度、青山の恵子の間借りの部屋に一週間ばかり暮らしてみたが、ゴタゴタと積み重ねてある筆筒、鏡台、机、椅子、雑多な小箱、靴、下駄、鍋、茶碗、その、ままごとのような四畳半のまん中に炬燵を置いて、／「いや、こりゃいいや」／旦那気取り、坐り込んでみたものの、恵子がいてくればまだしもだ。〔檀 一雄『火宅の人』新潮社版全集 第六巻〕

(20)の「醤油屋」以下は“職業”という類概念で括れそうだが、次の「牛蒡」以下は“てんぷら”という種概念で括れるだろうか？「蒟蒻」「鰯」などは、筆者の感覚ではてんぷらにはしない（筆者も一応、大阪・天王寺生まれなのだが）。(21)はなんとか“骨董品”で括れそうだが、(22)は“旅行に持っていったもの”、(23)は“たまたまそこにあったもの”であって、もはや類概念とは言い難い。無秩序で混沌としている。

結局、いずれの例も“ごちゃごちゃ”度、すなわち無秩序度はかなりのもので、列挙法らしい列挙法であると言ってよい。

8 列挙法の位置づけ

以上をまとめると、列挙法とは、「多数の短い同格の言葉を、勢いよく無秩序に並べ立てる表現法」となる。もっとも、これはあくまで典型的な場合であって、これらの要件のうち一つでも欠いたら列挙法ではなくなる、と主張するのではない。

列挙法をこのように考えると、修辞法の体系の中にどのように位置づけることができるだろうか。

これまでの研究では、列挙法を列叙法の下位に位置づけることが多かった。本稿も基本的には同じである。ただ、先行研究よりも明確に位置づけることができる。すなわち、上に述べた要件の中から「短い」「勢いよく」「無秩序に」を除いたものが、列叙法なのである。例えば、先の(13)は要素が長く、勢いもない。(8)も勢いに欠ける。(19)は、ある秩序が感じられる。これらの例は、列挙法でなく列叙法と言うほうが適切なのである。

位置づけの問題を、もう少し具体的に見てみよう。筆者の考えに最も近いのは、中村 明 1991 の次のものである（数字はコード番号）。

3 付加

3.7 詳悉法＝あらゆる面を必要以上に詳しく隙間なく述べ尽くす。

3.7.1 列叙法＝まとめて表現せず、各部に同等の力点をかけて、次から次へと念入りに積上げる。

3.7.1.1 列挙法＝同格の言葉を次々に並べたてる。

中村の体系化は、「言語操作」の観点から成されており、形式的でわかりやすいのが長所である。しかし上の定義は少し問題を含んでいる。例えば、列叙も「同格の言葉」を積み上げるものと普通は考える（佐藤 1978 など）。そこで、筆者の先の定義中の言葉を使い、さらに言葉を補って言い換えてみると、次のようになる。

3 付加

3.7 詳悉法＝一つの事象を多数の言葉を使って詳しく述べ尽くそうとする。

3.7.1 列叙法＝同格の言葉を次から次へと積み上げる。

3.7.1.1 列挙法＝短い言葉を勢いよく無秩序に並べ立てる。

上位概念のもつ性質は、下位概念も当然保持して

いる。厳密に階層化をするなら、例えばこのようになるであろう。

しかし中村は、近著2007において、枠組みを次のように変えてしまった（おそらくは佐々木他2006の影響）。

3.9 詳悉法=あらゆる面を必要以上に詳しく隙間なく述べ尽くす修辞技法。

3.10 列叙法=まとめて表現せず、各部に同等の力点を置いて、次から次へと念入りに積上げる修辞技法。

3.10.1 畳み掛け=短いことばをいくつも勢いよく重ねる修辞技法。

3.11 列挙法=同格の言葉を次々に並べたてる修辞技法。

この図では、詳悉法と列叙法と列挙法が対等の関係になっており、階層構造がなくなっている。しかし本文中では「(列挙法は)《列叙法》の一種」と言う(p.431など)。それならば列挙法は列叙法の下位に位置づけられるはずである。考え方が理解しにくい。

佐藤信夫1978、佐々木健一他2006も、列挙を列叙の下に置く点は同じである。後者については3節ですで見えたが、あまり従えない考え方であった。前者は次のようであるが、こちらの方が妥当であると思う(漸層法の位置づけについては保留する)。

列叙=ものごとを念入りに表現するために同格のさまざまなことばを次々と積みあげていく表現法

— 列挙法=さまざまな同格のことばを次から次へとならべたてていく表現
— 漸層法(略)

以上のものとかかなり異なるのが野内良三2005の考え方である。簡略化して図にしてみると、次のようになる。

列挙(enumeration)=語や観念を次々に繰り出し畳み掛ける

— 列挙=同類のものを動員。部分を積み重ね全体に迫るスタンス。

— 羅列(accumulation)=異種のもの。片端からかき集めるスタンス。

— 詳述=人物や事物の描写・説明を細密に、巨細に展開する。

佐々木らはaccumulationを「列叙」と呼び、「列挙」(enumeration)の上位に位置づけるが、野内は反対に下位に位置づける。野内の考え方には従えない。

9 おわりに

以上、列挙法のいくつかの問題について筆者なりの考えを述べてきた。自分の直感にもとづいた立言が多いので、あまり納得されないかもしれない。あるいは逆に「常識的」と非難されるかもしれない。(この二つの批判は本当は両立しないはずだが。)

そもそもレトリック用語は、諸家が独自の意味で使うことが多く、客観的なデータにもとづく議論にはなじまない面がある。その場合はなるべく常識に近いものがよいと考える。本稿で、一般的な辞書の記述を重視したゆえんである。

[注]

- 1) 要素が二つでよいと考える修辞学者も、いないわけではない。例えば脇坂豊他2002の「列挙」の項には「上位概念のかわりに、二つ以上の下位概念を並列して挙げていくことによって全体的な印象を強める手法」とある。さらに言えば、佐々木他2006も「多種列挙」などでは要素が二つの例を挙げている(p.335など)。
- 2) もっとも、「AトB」など、助詞を使った表現ならば要素2個のものは多い。例えば国立国語研究所の『国定教科書用語総覧CD-ROM版』(三省堂、1997)で並立のトを検索すると747例あり(「AトBトC」などは一つと数える)、うち703例(約94%)が要素が二つのものである。

引用文献

- 木原 茂1978「列挙法について」広島文教女子大学国文学会編『国語学国文学論攷』溪水社
 佐々木健一他2006『レトリック事典』大修館
 佐藤信夫1978『レトリック感覚』(講談社学術文庫版1992による)
 田中春美他1988『現代言語学辞典』成美堂
 寺村秀夫1991『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
 中村 明1991『日本語レトリックの体系』岩波書店
 — 2007『日本語の文体・レトリック辞典』東京堂出版
 野内良三2005『日本語修辞辞典』国書刊行会
 丸谷オ一1977『文章読本』(中公文庫版1980による)
 脇坂豊他2002『レトリック小辞典』同学社